

NAIST 20周年に寄せて



奈良先端科学技術大学院大学第3代学長・名誉教授
鳥居宏次

20年経過すると澱が溜まるとの先人の言葉がある。人間でいう成人の年齢と考えれば、新たな責任と義務とが生じながらも自律的な人生の一步が始まる年でもある。20周年を祝えることは大変喜ばしいことであるが、創設期の関係者で鬼籍に入られた諸先輩も少なくなく、改めて敬意とともに弔意を表したい。以下にはこの20年間で印象的な出来ごとを風化させない意味からも2,3紹介して、今後の期待を述べたい。

1991年10月からの1年半は近鉄奈良駅ビルでの間借り状態での大変な作業量をかかえた準備期間で始まった。情報A棟だけで、情報科学研究科に最初に学生を迎え入れたのは、1993年4月であった。周りは工事車両が動き、ぬかるみに気をつけながら、夜になれば野犬に噛みつかれないように棒を持って自衛しながらの歩行を勧められたこともあった。プレハブの食堂で数に限りあるカレーライスのみ準備されたこともあったが、それだけでも感謝したものである。

インターネット時代を先取りして高速大容量のキャンパスネットワークを曼陀羅ネットワークと称して、他大学のどこにもないネットワーク環境の充実を指向したのは情報科学研究科の若手教員の熱意が支えになった。斬新な概念であった電子図書館はその適用例としての最先端施設であった。

創設からほぼ10年後の2004年には国立大学の法人化が実現された。創設の経緯からいえば、創設準備室が置かれた大阪大学や京都大学の後塵を拝する可能性を秘めていた。しかるに、国立大学法人化の実現により、歴史の長さや規模の大小にかかわらず、どの国立大学も横一線でスタートラインに立つことができた千載一遇の機会が、本学にとってはチャンス到来と考えることができた。研究力など日本一を競う風潮もこの頃からであり、大学評価として厳しい試練が始まり、教職員の頑張りで今日の高い評価につながっている。

創設期には、我が国の学部学生数の増加に関連して本学のような大学院のみの大学院大学が生まれた。しかし、大学院重点化政策が拡大されるに従って、既設大学の大学院生の定員までもが増加するに及んで、定員充足率が現実の問題になり、大学院大学にも個性や特徴が求められる厳しい環境になった。時代とともにニーズが異なるが、大学本来の使命である、教育・研究・社会貢献にも柔軟に対応せざるを得ない。教育者だとか、研究者である以前に、学生に対峙し、研究テーマを遂行するとき、品格のある人間であることの大切さを常に意識しておいてほしい。このことは大学の格にも言える。

本学の名前が13字という長さであるが、今後の20年に向けて、最も大切な文字は先端であると思う。先端の意味内容は常に変化し、個人個人で違うが、場当たりの異端であることではなく、誰が考えても納得できる先端を求めて知恵を絞ってもらいたい。これこそNAISTの創設以来の宿命とでもいえるべきであろう。

今後の益々の発展を心より願うものである。